

2019年登録販売者試験in首都圏 第三章 & 第五章（一部解説）

【第三章】

問73 腸の薬及びその配合成分に関する次の記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a. トリメブチンマレイン酸塩は、消化管（胃及び腸）の平滑筋に直接作用して、消化管の運動を調整する作用があるとされている。
- b. 収斂成分を主体とする止瀉薬は、細菌性の下痢や食中毒のときに使用して腸の運動を鎮めると、かえって状態を悪化させるおそれがある。
- c. ゴバイシは、ミカン科のキハダ又はフェロデンドロン・キネンセの周皮を除いた樹皮を基原とし、腸管内の異常発酵等によって生じた有害な物質を吸着させることを目的として用いられる。
- d. ベルベリン塩化物、タンニン酸ベルベリンに含まれるベルベリンは、生薬のオウバクやオウレンの中に存在する物質のひとつであり、抗菌作用のほか、抗炎症作用も併せ持つとされる。

正解：a,b,d○

この問題の嫌なところはなんといっても「ゴバイシ」という生薬。

c: ミカン科キハダが基原植物の生薬は「オウバク」であることを覚えていれば答えられる。ゴバイシはヌルデという木の葉にできるヌルデシロアブラムシの虫こぶのことを指す。五倍に膨らむところから漢字で五倍子と書く。タンニンを多量に含み、かつてはお歯黒などの黒色染料に使われていた。

また、この問題文に出てくる「吸着」というキーワードから、後半の作用に関しては、炭酸カルシウムなどのカルシウム剤のことを指していることが分かる。

問89 外皮用薬の配合成分に関する次の記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a. インドメタシンは、皮膚の下層にある骨格筋や関節部まで浸透してプロスタグランジンの産生を促す作用を示す。
- b. ウフェナマートは、炎症を生じた組織に働いて、細胞膜の安定化、活性酸素の生成抑制などの作用により、抗炎症作用を示すと考えられている。
- c. ステロイド性抗炎症成分は、体の一部分に生じた湿疹、皮膚炎、かぶれ、あせも、虫さされ等の一時的な皮膚症状（ほてり、腫れ、痒み等）の緩和を目的として用いられる。
- d. フェルビナクには、殺菌作用があり、皮膚感染症に効果があるため、みずむし、たむし等又は化膿している患部への使用が適している。

正解：b,c○

ウフェナマートの作用が詳しく取り上げられることは少ないので、ピックアップしました。試験ではマイナー気味の成分ですが、現場ではよく使う成分です。

a: プロスタグランジンの産生を「促す」ではなく「抑える」。

d: 殺菌作用はないため、皮膚感染症に対しては効果がない。

【第五章】

問109 次の医薬品成分のうち、一般用医薬品の添付文書等において、乳汁中に移行する可能性があるため、「相談すること」の項目に「授乳中の人」と記載することとされている成分の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a. 止瀉薬に配合されたロペラミド塩酸塩
- b. 解熱鎮痛剤に配合されたアセトアミノフェン
- c. 鼻炎用内服薬に配合されたプソイドエフェドリン塩酸塩
- d. かぜ薬に配合されたトリプロリジン塩酸塩水和物

正解：a,c,d○

- a. ロペラミド塩酸塩：腸管運動抑制剤。
- b. アセトアミノフェン：乳児の解熱鎮痛剤としても広く使われているため、授乳中の方にも比較的安全に使用できる。
- c. プソイドエフェドリン塩酸塩：「～リン」より交感神経刺激薬と判別できる。
- d. トリプロリジン塩酸塩水和物：マイナー成分だが、メクリジンなどと同様、「～ジン」より抗ヒスタミン剤と判別できる。